

昔と変わらない島の姿を

これだけ多くの文化財がまとめられている所は県内でも珍しいと思います。実際、多くの権力者に保護され、参拝に遠方からでも訪れる人が絶えないからこそ、現在まで、これらの文化財を維持できたのではないかと思います。子どもの頃にお越しいただいた方が何十年後かに、再び島を訪れ、昔と変わらない面影に、当時を思い出される方もおられます。昔と変わらない島の姿をこれからも残していきたいと思っています。



都久夫須麻神社
生嶋 麻雄さん

都久夫須麻神社本殿（国宝）

浅井姫命などを祀る都久夫須麻神社の本殿。秀吉が建設した伏見城の御殿（一説には豊国廟とも）をその子・秀頼が慶長7年(1602)に移築したとされる。殿内には、狩野永徳・光信が描いたと伝わる天井絵や襖絵をはじめ、高台寺蒔絵の柱などが施されている。



狩野永徳・光信の作と伝わる天井絵・襖絵



鳥居の額の「巖金山」(宝蔵寺の山号)の文字は、神仏習合の名残



かわらけ投げ
一枚には名前を、もう一枚は願いごとを書いた素焼きの皿を、神社の拝殿から湖に投げると「かわらけ投げ」。鳥居をくぐれば願いがかなうという。



島の上から港を望む



島は岩壁に囲まれ、東側には小島もある

唐門（国宝）・観音堂（重要文化財）

秀吉の子・秀頼が慶長7年(1602)に、京都東山の豊国廟（秀吉を祀った霊所）から移築させたもの。観音堂の本尊は千手千眼観世音菩薩で、西国三十三所観音霊場の第三十番札所となっている。



祈りの階段
拝観受付から進むと、急勾配の階段がある。頂上の弁財天堂までの階段は「祈りの階段」と呼ばれている。

舟廊下（重要文化財）

観音堂と都久夫須麻神社本殿をつなぐ廊下。観音堂の移築と同時に建設され、秀吉の御座船（日本丸）を利用したともいわれ、舟廊下と呼ばれる。



荒井寛方の壁画



宝蔵寺弁財天堂
17年に建てられた宝蔵寺の本尊の壁には、日本画家・荒井寛方の壁画が描かれている。



島で何かを感じてもらえたら

車もなく、テレビもないような隔てられた島だからこそ、非日常の世界が、ここにはあるように思います。自然の中に身を置くことで、改めて自分を見つめるいい機会になるのではないかと思います。また、このような場だからこそ、各地から訪れる方と気軽に話ができ、やさしさを感じられたり、新たな自分を発見できたりできるのではないのでしょうか。お越しいただいた方には、何かを得て帰っていただきたいですね。



宝蔵寺
峰 賞雄さん

島での信仰

琵琶湖に浮かんでいてるかのように見える竹生島。古くは、平家物語で、「天女がすむ所」と紹介され、その美しさとともに、神秘的の島として、人々の心をひきつけてきました。また、訪れにくい場所であったからこそ、その思いがより大きくなったのかもしれない。そこに、水や湖、山（島）といった自然に対する感謝や畏敬の念を抱き、祈るといふ形になって、信仰を集めてきた。竹生島は、古くから人々にとって、特別な場所だったのでしょう。

島がいつごろから信仰されていたのかは定かではありませんが、「近江国風土記逸文」などによると、「昔、夷服岳（気吹雄命・現在の伊吹山）と浅井岳（浅井姫命・現在の金糞岳）が高さを競い、勝った夷服岳が浅井岳の首を切り、それが竹生島になった」という島の誕生に関する言い伝えが残っています。また、「竹生島縁起」によると、724年（神亀1）に、聖武天皇の命により、僧の行基が弁財天を祀ったことが、宝蔵寺のはじまりとされています。

まりとされています。このように、土地の神である浅井姫命と仏教信仰である弁財天とが、同じ島で信仰されるわけですが、いつしか同一のものともみなされるようになり、神と仏をともに崇め奉る形で信仰をひるげしてきました。明治政府の神仏分離令によって、現在では、神と仏は別々に信仰されていますが、神社と寺が廊下でつながっていることから、今もその名残が残っています。

今も変わらぬ島への思い

今日も、年間12万人を越える人々が島を訪れています。その意味で、竹生島は大切な観光資源であり、多くの人が守り続けてきた貴重な財産でもあります。この財産を守り、伝えていくためにも、まずは、島のことを知り、身近に感じることが大切だと思います。島に下り、絶壁のように急な石段の前に立つと、人々は何を思い、島を訪れたのか、人々の竹生島に対する思いがわかる気がします。島は多くの文化財とともに、先人たちの信仰心を今に伝えていきます。

人々にとって特別な場所

たが、それでも、数多くの宝物が守られ、都度、社殿や堂塔などが復旧されてきたことは、人々の厚い信仰を物語っています。